

ご案内

今月はいつもと変わって講演原稿のご紹介です。4月に昭島市の国際交流団体からの依頼で「世界おもしろ文化比較」のタイトルで英語と日本語で講演しました。また6月には練馬区の福祉文化研究会の年次総会で、ほぼ同じ内容を日本語のみでお話ししました。

このテーマについてはこれまでも何回か講演の機会がありましたが、今回は総括としてできるだけユニークな視点と面白い話に絞りまとめたところです。

原稿はさらにスペイン語にも訳し「講演会のスピーチ」「English Page」「Página en Español」に載せましたが、ふだん一番アクセスをいただいているこの「気まま随想」でもご紹介する次第です。10ページと少々長いですが楽しんでいただければ幸いです。

20190623 福祉文化研究会 世界おもしろ文化比較



——丸い地球のいたずらと楽しみ——

第1部 ラテン・アメリカでの体験・見聞から

「ハゲアタマ」で輝こう

最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。2008年から2016年まで8年余り、ボイスメールの原稿をもう一人の方と交互に書かせていただきました清水武と申します。

久しぶりにこちらにお邪魔して、会場に私と同じような仲間がいることを拝見して親しみを感じています。この頭です。

先日、こんなことがありました。私は年金生活に入ってからできるだけ節約生活を心がけるようにしています。散髪代もその一つ。床屋さんに行くのをやめ、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなときには、やっぱり床屋さんに行くんですね。でも、この頭です。



他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

「マスター、ほらご覧のように、私の頭はほかの人の髪の毛の半分以下ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし……。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」。

と、その主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけですよ。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」

敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。あの中高年のアイドル、綾小路きみまろさん だったらこう言うでしょう。

「中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。あれから60年——。昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ……」

ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、心の持ち

方次第では人生も輝いてくる。

人生を愉しく充実させ、輝かせていくカギは「はげあたま」にあるのです。

「はつらつ」と「げんき」に「あかるく」「たのしく」そして「まあるく」生きていくのです。特にこの最後の「まあるく」が大事ですね。ここは「まえむきに」としてもよい。

人とぶつかり、人の悪口を言っているかもしれない。人生、すでに角が取れて、まあるくなくなってきている年代のはずですから、自分だけのためにキュウキュウしているのではなく、人を助け、人をたたえ、人を褒めていくことです。そうすれば、自分が助けられ、たたえられ、ほめられるようになっていきます。

「人のために灯をともしれば自分の前も明るくなる」と仏典に言われている通りでしょう。そして自分自身が輝いていれば、そこには自ずと“自分も輝きたい”という人も寄ってきます。生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してくるでしょう。人生をどんな色に染め上げていくことができるかは、まさに各人の心がけ次第だと思います。

国際電話の時差からくるギャップ

さて、本題に入っていきたいと思います。

3月8日、有楽町の東京スポーツスクウェアで、来年の東京オリンピック・パラリンピックの大会ボランティアの面接とオリエンテーションに行ってきました。私は「メディア部門」で申し込みました。その研修が9月から始まることになっています。



今年の夏には多くの特派員やリポーターが取材で東京を訪れると思いますが、母国との電話交信の最初にちょっと戸惑いを感じずるかもしれません。

特派員だった現役時代の私の体験です。

ブラジルですべての取材が終わり原稿をまとめ本社に電話するのは夜の10時頃。日本では朝の10時です。ブラジルは日本とちょうど12時間遅れの時差があります。

こちらはホテルのあまり明るくない部屋の灯りのもとで「コンバンワ」。でも相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい呼吸、モーニングコーヒーで張り切っているときなんですね。

この時差からくるギャップ！ 戸惑いのことなのです。慣れてくればだんだん乗り越えていかれるのですが・・・

“エッ 日本は地球の裏側” だって？

そう、ブラジルといえば、こんなこともありました。位置はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしている「日本の真裏のブラジル」と言ってしまう、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってるんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとはかなり違っています。最も一般的な日本の地図（メルカトル図法）では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸とアフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれています。ブラジルなどは右下の端の方にある。



ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島の端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

子供のころ聞いたラジオの天気予報では「表日本は晴れますが、裏日本は雪でしょう」と言っていました。皆さん、今は何と言っているかわかりますか？
そう、「表日本」ではなく「太平洋側」、「裏日本」ではなく「日本海側」ですね。やはりそこに住む人にとっては「裏」と呼ばれるのはあまり気持ちよくないわけです。なかには山陽地方と山陰地方についても、山陰を山光と呼んだらどうだろう、と提案する識者もいますよね。

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズを試みましょう。これは中学校の総合学習の授業の際に生徒によく聞いてみる質問です。人生経験の豊かな皆様にこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれません・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次の4つのどれでしょうか？

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地球の自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、必ずしもそうではない、さらに1番ともなると論外ですよ。

エクアドルに行った時<実は国名の「エクアドル」とはスペイン語で「赤道」の意味、英語では「equator」ですね>、私はその「赤道標」といわれるものを訪れました。

首都キト市の郊外へ車で小1時間。荒涼とした禿山のふもとのやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。



四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんです。

[E]（東）[O]（西）面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線がはるか遠く東西に伸びていまし

た。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道の象徴”なのです。

でも色は何もついていません。赤色でもなく、地面の汚れと土ぼこりでそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていた指示を思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとりました。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ!とうとう地球をまたぎましたネ」——と。

この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。もちろん、またいだ両足も大事な股間も、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏10度前後で肌寒いほど。キトが海拔2800mの



高地にあるからです。その後を訪れた同じエクアドル領のガラパゴス諸島は太平洋の赤道直下で海拔ゼロメートル、ここは1年中30度前後の熱帯でした。

この赤道の下半分、南半球では四季も反対になります。日本は今、初夏ですが、南米のブラジルやアルゼンチンでは、初冬なんですね。

「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も4~5分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私の駐在していたパナマではそうした問題はありませんでした。それは電車がなかったからです（運河鉄道があり最近ではパナマ市に地下鉄ができた）。小さな国なので近場へは自動車かバスで、国外へは飛行機が一般的でした。

こうしたなか、分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタ・マニャーナ」でよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」「あしたまで」という意味ですが、5時または6時になると、仕事が途中で、店にお客さんがいても「アスタ・マニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタ・マニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついてるのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も「これこれ、しかじかの取材をいつまでに」との指示を東京本社から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にと

うとう自分で「五つの『あ』の原則」を編み上げたのです。

<ボードへ転記>

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」それでも決して「あきらめず」――。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきました。海外ではまさに“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

中南米で見る一つの大きな特徴は人種の混交です。

よく、ニューヨークは“人種の坩堝（るつぼ）”と言われていますが、首都のパナマシティも同じです。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

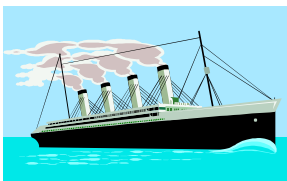
「S r シミズ (M r シミズ)、日本での研修会は素晴らしかった。大勢の仲間にも会うことができ、あのシンカンセンにも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しました。充実した日本滞在だった。でも、とつても驚いたことが一つあったんですよ。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオ（インディアン）と、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それにパナマ運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100 人集まれば、100 人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もともと、日本も近年は、いろんな国の人々が東京にまた地方にも住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが……。

報道によれば、日本は労働力の不足を補うためにこれから 30 万人の外国人を受け入れる、といいます。状況は変わりつつありますね。

世界で語られている日本人についてのジョーク



海に囲まれた、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄も流布しています。よく知られたタイタニックのジョークです。多分、この会場にも知っていられる方もいるかと思いますが……。

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。

大混乱になろうとしている現場で、婦人子供を優先させようとして船長が説得を試みます」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」（アメリカは勇者が尊敬される社会ですね。昔「勇者は沈みぬ」といったタイトルを聞いたことがあります）
イギリス人男性に：「あなたは模範的なジェントルマンだ！」（ジェントルマンがどんな行動をとるべきかおのずと決まってくるでしょう）

ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうなっているよ」（ドイツは法律がすべての国ですね）

そして日本人男性には：「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持っている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思います。

第2部 定年留学、世界文学紀行でのエピソードから

高校時代からの夢を実現

ラテン・アメリカに10年間駐在、各国を訪ねて感じたこと、それは、これらの地の文化の原点はすべてスペインにある、ということでした（ブラジルのみポルトガル）。1492年、コロンブスが新大陸に到着して以来カトリックを軸にしたヨーロッパ文化が入っていったのです。

そこで、私はいつかはスペインに行き、その原点を探りたい、特にその文学の原点ともいうべき「ドン・キホーテ」を究めてみたい、との夢を抱いていました。

2001年に定年となった私はその夢を実現し、南スペインの地中海沿岸コスタ・デル・ソル(太陽海岸)にあるマラガ大学に留学しました。

もう50年以上も前、私の田舎の高校時代には、留学なんて夢のまた夢、都会の超優秀生がフルブライト奨学金を利用した留学ができる、といった話を聞いたのみでした。1ドル360円。それも自由に外貨が手に入らない時代でした。あれから日本と世界の環境は変わり、今は1ドル110円前後。“国際化”の波に乗って、誰でも海外に行ける時代です。



留学——こんなよいものは若者だけに許しておくことはないでしょう。これまで家族を支えるために必死で働いてきた父親族も、少し人生を振り返る余裕のできた定年後に、若い時代にできなかった夢を実現しようと考えても責められる理由はないだろう、ということで、第二の人生を歩み始めたのでした。

日本語についての研究発表

そこで、留学していたマラガ大学で体験・見聞をしたエピソードのいくつかをご紹介します。

私がいたクラスには多彩な民族、国籍、年齢の学生が集っていました。スウェーデン、ノルウェー、デンマークといった北欧の国、ドイツ、イギリス、フランス、エストニアなどのヨーロッパの国々を中心に、アメリカ、アジアの国々、それにアフリカからも来ていました。

その仲間たちが教室ではすべてファーストネームで呼び合います。教師もクラスメートもみんなこの歳をとった私のことを「タケシ」（アクセント注意）と呼ぶのです。教師に対し、自分たち生徒も「ラウラ」（文法担当）、「ラファエル」（会話担当）とファーストネームで呼んだものです。



英語圏でもこの傾向はほぼ同じですね。スペイン語は動詞の活用が難しいですが、日本人にとって発音は英語などよりも易しいです。「アエイオウ」の母音が同じだからです。

その一方でご存知のように日本語の文字には3種類ありますね。ひらがな、カタカナ、漢字です。ひらがな、カタカナともに48字ですが、漢字となると、ふつうに社会

生活をするために知っておく文字は2000字近くになります。

外国人がこれらの文字を記憶するには、大変な努力と時間が必要なのです。（「日本人だっておんなじだ！！」と言う方もいるかもしれませんね）

以下はマラガ大学のクラスで私が日本語について研究発表した一部です。

——まず、日本語では自分自身を表現するのにも、10近くの言い方があります。（黒板に書く → 参加者に他の例を聞く）

私（わたくし）、私（わたし）、僕、俺、我、内（うち）、手前、小生、等々。

「わたくし」はより丁寧で上質の表現です。「わたし」は比較的丁寧な表現で、最も一般的に使われていますね。

「僕」「俺」「我」とも男性が使用。このうち「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧さを欠き、「我」はやや古い表現です。「内」は両性によって使われます。「手前」はへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われますね。日本の社会で大切なのは「謙譲」の心です。これをわきまえないと、まわりから「あいつは傲慢だ。頭が高い」と言われかねないのです。

スペイン語では、自分を表現する言葉は「Yo」の一つだけです。英語でも同じ「I」だけですね？ もちろん、動詞の使い方によって、丁寧の度合いを変えていくことがあります。でも、日本語の尊敬語、丁寧語、謙譲語ほどの複雑さではないと思います。こうした日本語の複雑さと難しさについての発表だったのです。

クラス仲間を我が家に招待

留学生仲間が日本食を食べたいというので、10月のある日、アパートに招待しました。私にとって彼（女）らは、年齢的に自分の息子や娘のようなものです。わが娘も、かつてメキシコのグアナフアト大学に留学したことがある。そのときに周囲のいろんな人に、何かとお世話になったかもしれない。そう思えば、遠く母国を離れて学ぶ彼らに、若干でも激励になれば、恩返しというほどの大げさなものではないけれど、地球上のどこにあっても“お互いさま”じゃないかとの思いもあつたからです。

それに、私は定年になってからすぐにクッキングスクールに1年間通っていました。そこで十八番となっている中華料理を2品、妻は鳥のから揚げ等の洋食2品、それに、みんなが食べてみたい、と言っていた握りずしを用意しました。

幸いにスペインは、カナリア諸島近海の良質なマグロを日本にも輸出している国です。スーパーでもときどきスペインマグロが見られますよね。でも値段が結構高い。ところが現地では、近くのスーパーですばらしいマグロのトロが日本の3分の1ほどの値段で安く手に入ったのです。

美人女子大生とのキスと抱擁！

昼食時間はスペインタイムの午後2時に合わせてあります<時間の解説>。準備がほぼできたところへアパートの玄関のベルが鳴りました。私はあわてて、スリッパをやや厚底の靴に履き替えました。小柄な自分が、背の高い彼らに少しでも合わせようとの心と、靴で入ってくる彼らが遠慮しなくていいように、同じものを部屋で履いている必要があったからです。

8人がぞろぞろと我が家に入ってきました。

「ムイ ビエンベニード！ Welcome（ようこそ！）」

私はエプロンを脱いで、玄関に立ち、女性とは一人ひとり両頬にキスし、男性とは力強い握手で来宅を歓迎しました。学校内では、恋人同士でもなければキスすることはありません。でも、スペインで学校をはなれたとき、親しい間柄での最大の歓迎の意を表すのはやはりキスなのです。



キスといっても、唇ではなく、軽く抱き合い両頬を触れ合うだけのもの。これをしないと却って歓迎の意が弱く、堅苦しい雰囲気になるからなのです。

とはいえ、金髪の美人女子大生とのキスは、瞬間的でも心をときめかすものがあります。妻も同じように全員と、しかも男子学生ともキスしているわけだから、こちらも問題ありません。還暦を超えて、若い外国人女性と頬を触れ合わせられるのも、スペインという文化風土にいるからこそ、といえるのかもしれませんが。

文学紀行のエピソードから

ここでスペインからヨーロッパ全体に少し目を広げてみましょう。留学を終わると私は世界文学紀行を始めました。

第一作目はセルバンテスの『ドン・キホーテ』。以後、『風と共に去りぬ』（アメリカ）『赤毛のアン』（カナダ）『ロミオとジュリエット』『ベニスの商人』（イタリア）『ハムレット』（デンマーク）『ファースト』『車輪の下』（ドイツ）、アンデルセン童話、グリム童話（それぞれデンマークとドイツ）、『戦争と平和』『罪と罰』（ロシア）、『レ・ミゼラブル』『三銃士』（フランス）と現在までに15作品にいたっていますが、すべてを紹介する時間もないので、出版150周年で訪れたヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』に関する面白いエピソードをお話します。

「ああ、抱けなかったマドモアゼル！」



7年前の夏、私は『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の舞台の取材のためにパリを訪れました。パリに到着した最初の日の午後5時ころ、少し時間があつたのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

入り口で自由席券（100ユーロ、約13,000円）を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。隣の席には若くて美しいフランス女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

“May I take this seat?” (お隣に座ってもよろしいですか?)

彼女も私の英語がわかっただけでなく “Sure, of course” (ええ、どうぞ) とニコリとうなずきました。彼女は30代前半くらいで魅力的な美人でした。

親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとするフランス人作家の作品の舞台や場所について相談しようと思ひ話しかけました。と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたの訪れようとする作品については私もある程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれません。よかったですら自宅にいらっしやいませんか。家はここからそんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな!”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近く、瀟洒なマンションの3階でした。「よろしかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれ、言ったのです。

「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言う彼女がバスルームに入っていきました。部屋にひとり残った私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。しばらくして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き!!

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってもよいかわからず、ソファに座ったまま動きがとれずにいました。と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのです。パリと東京には8時間の時差があります。夕方5時は日本の真夜中の1時になっていたのです。

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

時差の話をつくつてまいりました。最後に私のパソコン生活最前線のエピソードをご紹介します。

ちょうど13年前にホームページを立ち上げ英語とスペイン語のページも設けました。でも、正しい翻訳のためにはネイティブチェックが必要です。私も日本に住んでいる外国人の友人もいますが皆忙しい。そこで特派員時代に知り合った友人の、英語はアメリカに住むKさん、スペイン語はパナマに住むMさんに頼むことにしました。



こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは昼間。早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。つまり、こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。

「あんたはいいね。魔法の枕を持っている」なんて友人から揶揄されたこともあります。



更に、世界に事業所を持つグローバルな企業ではこんな芸当もやっつてのけます。

そこでは、パソコンによる一つの仕事を、インターネットを使い、例えばアメリカのニューヨークで立ち上げたプロジェクトを、仕事時間が終わるとインドへ送る。インドでは続きの作業をし夕方になると今度はインターネットでイギリスへ送る。イギリスではまたその続きの作業をして仕事の時間が終わるとアメリカへ送り返す・・・こうして地球の昼時間を追っかけてその仕事が継続されていく——つまりそれぞれの国の労働者は仕事が終わり眠っていても、リレーされたその作業は24時間どこかの国で続いているのです。

単純に1日8時間労働として、1日に3倍の作業が進んでいるわけです。



丸い地球の時差を活用！ 時代の最先端のご紹介です。

世界の文化比較から時差についてなどのエピソードをご紹介してまいりましたが、皆様が何かをお感じになり、人生のヒントとなり、御参考になればこんな嬉しいことはございません。

これをもって私の話は終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。